

『トロイルス』における「死」の役割

An Aspect of Chaucer's "Death" in *Troilus and Criseyde*

本田 崇洋

福島工業高等専門学校一般教科

Takahiro Honda

Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2014年9月18日受理)

Chaucer's *Troilus and Criseyde* is composed based on Boccaccio's *Il Firostrato*. Chaucer often inserts the idea of "death" in some scenes of the protagonists' grief for love, and changes Boccaccio's original words into the words associated with the fear of "death". Not only inserting the idea of "death" into his work, but also Chaucer, at the same time, describes some scenes to relieve the fear and sorrow of "death". The scenes where the protagonists' pains are relieved suggest "consolation" or "salvation", the orthodox conception in Christianity in the Middle Ages. His intentional emphasis on "death" and the motif of the consolation can be uniquely found in *The Canterbury Tales*. Chaucer's idea of "death", deeply concerned with his private life in 1380s, suggests another aspect of *Troilus and Criseyde*.

Key words: *Troilus and Criseyde*, *The Canterbury Tales*, death, life, consolation

1. 序

チョーサー(Geoffrey Chaucer)の『トロイルス』(*Troilus and Criseyde*)は、ボッカチオ(Giovanni Boccaccio)の『フィロストラト』(*Il Filostrato*)を種本としている。『トロイルス』は、様々な書物に影響され、その独自性を示している。例えば、ポエティウス(Anicius Manlius Torquatus Severinus Boethius)の『哲学の慰め』(*De consolatione philosophiae*)からも影響を見ることができる。ウィンディアット(B.A. Windeatt)は『トロイルス』の巻数は全五巻であるが、『哲学の慰め』もまた全五巻であり、これは、『フィロストラト』を枠組みとしながらも、独自に『哲学の慰め』の構想を模倣していることを指摘している。¹他にも、ダンテ(Dante Alighieri)の『神曲』(*La Divina Commedia*)、ボッカチオの『テセイダ』(*Teseida*)、『薔薇物語』(*Le Roman de la Rosa*)からも影響が指摘されている。²『トロイルス』は、忠実な『フィロストラト』の翻訳ではなく、様々な書物から影響されており、いわば、チョーサー独自のトロイ物語であると言える。

チョーサーの『トロイルス』の特徴の一つは、『フィロストラト』よりも、物語全体に「死」が強調されている点にある。チョーサーは、『フィロストラト』にある登場人物の台詞や行動に対して、「死」を強く印象付けるように描き変えている。『トロイルス』と『フィロストラト』の共通点は、トロイルスは、それまで苦勞の果てに手にした幸福を失い無惨に死んで行くという運命の女神に翻弄される「悲劇」である。³トロイルスがこの世で死ぬことが運命づけられていることは前提条件である。トロイルスの悲劇的な「死」は、物語の根幹部分の一つであり、「悲劇」の枠組みの中で「死」のイメージを意識的に挿入することは、トロイルスの死と何らかの関係があるはずである。本論では『フィロストラト』から変換された「死」を視点に、チョーサーの「死」への変換の意味、人間の死に対するチョーサーの目を考察して行く。⁴

¹ B. A. Windeatt, ed., *Geoffrey Chaucer Troilus & Criseyde a New Edition of The Book of Troilus*, (London: Longman, 1984) 12-13.

² Windeatt (1984) 13-16.

³ ここでいう「悲劇」("tragedy")は幸福な状態から不幸な状態へ至る物語を言う。悲劇の定義について詳しくは、Henry Ansgar Kelly, *Ideas and Forms of Tragedy from Aristotle to the Middle Ages* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993)

⁴ 本稿のチョーサーのテキストは Benson, L. D., ed. *The Riverside Chaucer*. 3rd edn. (Oxford: Oxford University Press, 2008) による。また、『フィロス

I

チョーサーの「死」の観念が意図的に導入されている一つの場面は、クリセイデに恋してしまい、トロイルスはその想いを歌にする時である。この場面については、ペトルルカ (Francesco Petrarca) の『カンツォニエレ』 (*Canzoniere*) が元となっている。チョーサーは、「恋の矛盾」を嘆く「ソネット 132」を翻訳し、トロイルスの恋の悲しみを表現するために、『トロイルス』に挿入している。ここでチョーサーは、「ソネット 132」を忠実に翻訳しているが、最後に “for hote of cold, for cold of hote, I dye.” (I. 420) (「冷たい暑さの中で、暑い寒さの中で僕は死ぬのだ」という、ペトルルカの作品にはない一文を加え、トロイルスの恋の嘆きに「死」の概念を与えている。⁵

この場面以外にも、特に第一巻には、トロイルスの恋愛の苦しみが「死」に変換されることが多い。

“Lo, here his lif, and from the deth his cure.”

(I. 469) (underline mine)

“God wold I were aryued in the porte / Of deth, to which my sorwe wol me lede!”

(I.526-7) (underline mine)

“O mercy, dere herte, and help me from / The deth.”

(I. 535-6) (underline mine)

“Ther is another thing I take of hede / Wel more than aught the Grekes han yet wrought, / Which cause is of my deth for sorowe and thought;”

(I. 577-9) (underline mine)

“Therto desir so brennyngly me assaileth, / That to ben slayn it were a gretter ioie / To me than kyng of Grece ben and Troye.”

(I. 607-9) (underline mine)

“for to dyen in the peyne,”

(I. 674) (underline mine)

“Ek I nyl nat ben cured, I wol deye.”

(I. 758) (underline mine)

“What may she demen oother of thy deeth / If thow thus deye and she not why it is,”

(I. 799- 800) (underline mine)

“And of his deth his lady naught to wite;”

トラト』のテキストは B. A. Windeatt, ed., *Geoffrey Chaucer Troilus & Criseyde a New Edition of The Book of Troilus*; (London: Longman, 1984)を使用。

⁵ Windeatt (1984) 112-3.

(I. 825) (underline mine)

“For dredeles me were levere dye”

(I. 1034) (underline mine)

“that thow me recomande / To hire that to the deth me may comande.”

(I. 1056-7)(underline mine)

いわば、トロイルスの「死」は、死に近いほどの絶望である。トロイルスの恋の苦しきは、確かな未来を確信できない絶望的苦痛と言える。トロイルスの恐怖は、クリセイデに想いが受け入れてもらえるかどうか、先が見えない恐怖である。恋する心境は、中世文学のコンベンションとしてよく見られ、小鳥がさえずり、色とりどりの花が咲き、草木が芽生え、陽気な春の特徴のように描かれる。恋は幸せなことであるが、想いが相手に受け入れられないのであれば不幸となる。トロイルスの恐怖は、現時点では、幸せになるか不幸になるかは知ることではできない不安である。チョーサーはトロイルスの恐怖を、単なる恋の病ではなく、死の恐怖として表現するのである。

トロイルスは、自分の未来に対する「確信」や「決定」を見出すことはできないため、彼の心には、「絶望」と「希望」といった相反する要素が混在する。例えば、以下の引用は先に述べたペトルルカのソネットを元にしたものである。そこで、トロイルスは「死」で表現した恋煩いの苦しみを次のように表現している。

O quike deth, O swete harm so queynte,

(I.411)(underlines mine)

Allas, what is this wondre maladie?

For hote of cold, for cold of hote, I dye.

(I.419-20) (underlines mine)

トロイルスは“quike”と“deth”、“swete”と“harm”というように相反する要素を並べて自分の心境を表現する。基本的に、トロイルスの恋に対する態度は悲観的であるが、心の中には“deth”と“harm”という消極的な言葉とは対照的に“quike”と“swete”という楽観的な感覚も持つ。トロイルスは、希望や絶望かどちらか一方に心が定まっていないのである。チョーサーが独自に付け加えた、トロイルスが歌の最後に述べた言葉、「“hote of cold” (寒さの中の暑さ)と“cold of hote” (暑さの中の寒さ)で死ぬ」は、彼の絶望と希望の相克する心理を示していると言える。

『トロイルス』で、“quike”と“deth”、“swete”と“harm”、“hote”と“cold”といったように相反する要素が一つの世界に存在すること、それは「地上の世界」の特徴を示している。恋の手引きを熟知しているパ

ンダルスは、恋に苦しむトロイルスに次のような助言を与える。

"For thilke grownd that bereth the wedes wikke
Bereth ek thise holsom herbes, as ful ofte
Next the foule netle, rough and thikke,
The rose waxeth swoote and smothe and softe;
And next the valeye is the hil o-lofte;
And next the derke nyght the glade morwe;
And also ioie is next the fyn of sorwe.

(I. 946-52) (underlines mine)

同じ土地に、毒草が生い茂れば、また薬草も茂る。不気味な刺草の隣に甘い薔薇が育つ、深い谷間の隣には高い山がそびえる、と述べられる。暗い夜の後は明るい朝が、喜びの後には、悲しみがやってくる。中世時代に、このような修辞学的な対照法は、オウィディウス (Publius Ovidius Naso) の『恋愛治療』(*Remedia Amoris*) やアラヌス (Alanus de Insulis) の『寓言の書』 (*Liber Parabolarum*) に見ることができる。“the wedes wikke” と “thise holsom herbes”、“the foule netle, rough and thikke” と “The rose waxeth swoote and smothe and softe”、“the valeye” と “the hill”、“the derke nyght” と “the glade morwe”、“ioie” と “sorwe” といった反対物が同じ土地、つまり、一つの世界の中に存在するという。トロイルスが感じる心、つまり「心」という一つの世界に「悲しみ」と、その反対物である「喜び」もまた存在するのである。

例えば、クルティウス (Ernst Robert Curtius) は、古代、中世ヨーロッパ文学における “locus amoenus” を考察するときに、「対照物の調和」とは一定の感情表現であり、それには、強い生命力を宿していることを指摘している。⁶ この指摘はチョーサーのトロイルスにも当てはめることができる。言い換えれば、相克する心の苦しみにあるトロイルスは、完全な「絶望」に陥ってはいないということである。今道友信によれば、「地獄」は一切希望のない絶望の世界であると言う。⁷ トロイルスは確かに絶望しているが、希望を失うことはない。絶望はしているが、希望も確かに存在する、どれほど絶望してもトロイルスの世界は「地獄」ではないのである。中世人にとって、苦しみの中に希望をもつことは、普遍的な心境であると言える。例えば、地上の苦しい世界の中で希望を持つことは、エジプトで奴隷として苦しめられ

るイスラエルの民が神を信じ、「約束の地」を目指して、苦境に耐えた話を彷彿とさせる。チョーサーは「死」の恐怖を通して、「地獄」を描いてはいない。死に恐怖しながらも、相反する要素が存在するトロイルスの心は、地上の世界が象徴されているのである。

II

チョーサーがトロイルスの恋の嘆きに与えた「死」の観念は何を意味し、また、トロイルスの本来の悲劇的な「死」とどのような関連があるのか。トロイルスの恋愛は成就するが、議会が決定した捕虜交換を理由にクリセイデはギリシアへ行かなくてはならない。トロイルスから離れなければならないが、クリセイデは必ず戻ってくると言う。しかし、クリセイデはギリシアでディオメデスに心を奪われ、トロイへ戻ってくることはない。クリセイデに裏切られたことを知ったトロイルスは絶望しながら戦場を駆け、哀れにも戦死する。注目すべきは、その後、トロイルスが天上の世界へ誘われたとき、儂い幸福とは異なる「永遠の幸福」を感じたことである。天上の世界へトロイルスが誘われるこの場面は、『フィロストラト』にはないチョーサーが独自に加えた場面である。この場面は、ボッカチオの『テセイダ』 (*Teseida*) が元となっている。⁸ 『フィロストラト』はトロイルスの悲劇的な死で幕を閉じるが、チョーサーの場合、トロイルスの死を傍観して終わることはない。チョーサーは、トロイルスの生から死までの過程に着目し、運命の女神に翻弄された悲劇な人物を救おうとした。天上への誘いは、トロイルスの死に対する「救済」と捉えることができるのである。

『トロイルス』の眼目は、恋愛のプロセスと主人公の内面的な人格的成熟であると指摘される。⁹ 確かに、チョーサーは愛の詩人という側面もある。例えば、『薔薇物語』を翻訳していた初期の頃であれば、「愛」を追求していた。しかし、中期から後期に移行すると、恋愛だけではなく、さらに他の要素が加わったと捉えることが妥当である。

『トロイルス』で描かれる「死」に関して、ウィンディアットは、トロイルスのような愛による犠牲的な「死」はキリストの死を彷彿させるものであると言う。¹⁰ 結

⁸ Windeatt (1984) 559.

⁹ 岡三郎訳『トロイルス』(国文社, 2005) 575.

¹⁰ B. A. Windeatt, *Oxford Guides to Chaucer: Troilus and Criseyde*, (Oxford: Oxford University Press, 1995) 238.

⁶ E.R.クルティウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一 他訳, (みすず書房, 1971) 288.

⁷ 今道友信『ダンテ神曲講義』(みすず書房, 2002) 281.

末に描かれたトロイルスの悲劇的な「死」は救済されたが、その一方で、クリセイデの恋煩いという苦しみの「死」に対してチョーサーはどのように表現しているのか。苦難の果てにトロイルスとクリセイデが結ばれたとき、チョーサーは「トロイルスは、死が確定し、自分が死ななければならないと思っているときに、クリセイデと結ばれることで、救いの手によって死から救出された人である。(III. 1240-4)」と表現する。クリセイデと結ばれることによって、トロイルスの絶望的な「死」は救済されているのである。クリセイデ自身は、トロイルスにとっての「救い」の存在であると言える。

この物語の一番始めに「トロイルスには二度の悲しみが訪れる」ことが前置きとして語られる(“The double sorwe of Troilus to tellen” (I. 1)(underline mine))。“The double sorwe”は具体的に明示されることはないが、一度目のトロイルスの悲しみは、「死」で表現されるほどの恋の苦しみであり、二度目の悲しみはクリセイデに裏切られ、戦場で命を落とすこと、この二つであることは明らかである。そのため、『トロイルス』の“The double sorwe”には二つの「死」が象徴され、それに対する「救済」もまた含意されているのである。

二度に渡る死の救済には、「地上」と「天上」の違いがある。一度目のトロイルスの恋の「死」の救済は、地上的である。死の際にあるトロイルスを癒すことのできるクリセイデでは、救いの存在であった。しかし、救いの象徴であるクリセイデは、気まぐれで人を裏切った事実も忘れてはならない。確かにトロイルスは、一時的に救われるが、その救済に確実性を期待することはできない。これは、『哲学の慰め』の第二巻で中心的に語られるように、地上の幸福は信用できないという考えに基づいている。クリセイデの救いによって得た喜びはすぐに崩壊する運命にある。しかし、地上の世界に住む人間にとっては、一時の喜びは価値あるものである。例えば、トロイルスがクリセイデと結ばれたとき、表現されたときには、「多くの苦痛は人々を天国(“heuene”)へ導くものである。」(III. 1204)とある。トロイルスの心境は地上にありながらも“heuene”にいる心境である。

チョーサーの二つの死とその救済の描き方は特徴的である。地上での救済を示し、その後、天上への救済が、並べて描かれている。このような対照的な描き方はチョーサーが意識的に描いていると思われる。「恋」の苦しみに陥るトロイルスを慰めるときに、パンダルスは興味深いことを述べる。

By his contrarie is every thyng declared.

(I. 637)(underline mine)

「反対の物によって全ては明らかにされる。」

Ech set by other, more for other semeth,

As men may se, and so the wyse it demeth. (I. 643-4)

「別のものが並べられるため、一層よくそれが見分けられる。」

Sith thus of two contraries is o lore,

(I. 645)(underline mine)

「二つの反対物から一つの原則がわかる。」

“contrarie” (反対物)を並列することによって、物事は比較され、その本質が明らかになると言う。例えば、「悲しみ」を感じると、その後の「喜び」の度合いは一層心に染みる。チョーサーの描く「地上」と「天上」は“contrarie”の関係にあり、チョーサーは、その「救い」の性質と価値の違いを読み手や聞き手に、パンダルスの手法で示し、その違いを明確に示しているのである。

「地獄」と「天国」と異なり、「地上」の世界の特徴の一つは、時間が流れることである。チョーサーは『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)では、巡礼の過程で、その都度、太陽の位置や時刻を語る。これは、チョーサーに「時間」という概念の意識が常に存在していることを示している。時が流れることは、常に物事は流動的に展開していることである。時間を楽観的な観点から見れば、苦しみはいずれ消滅するという「希望」となる。

III

1386年に完成された『トロイルス』の後、1387年に『カンタベリー物語』が書き始められた。『トロイルス』と『カンタベリー物語』の制作は近い時期であり、いわば一つのモチーフで結びついていたとしても不思議ではない。つまり、トロイルスの「救済」のモチーフは、『カンタベリー物語』へ通じているのではないか。

『トロイルス』の最後の場面でチョーサーは、トロイルスのような悲劇ではなく、次は喜劇(“comedye”)を創作したいと言う(V 1786-8)。『トロイルス』で述べられる「次の作品」は、『カンタベリー物語』であると指摘されている。¹¹

『トロイルス』では「死」の観念が意識的に挿入されていたが、『カンタベリー物語』でも「死」のテーマは意識的に用いられていると言える。『カンタベリー物語』では「死」を扱う物語が幾つかあり、その物語群には一

¹¹ Laura Kendrick, “Comedy”, *A Companion to Chaucer.*, Peter Brown, ed., (Malden: Blackwell, 2000) 92.

つの特徴が見られる。例えば、チョーサーの初期の作品である『公爵夫人の書』(*The Book of the Duchess*)では、黒騎士の恋人がペストで亡くなるという「死」のテーマを扱っている。ペストによる死は、いわば、病死である。しかしながら、後期の作品である『カンタベリー物語』で描かれる「死」は、病死や寿命という自然な死ではなく、人によってもたらされる「死」、つまり、「殺人」である。¹² 「免罪符売りの話」(“The Pardoner’s Tale”)では、金に目がくらんだ強欲な悪党三人が互いに騙しあい殺しあう。「修道士の話」(“The Monk’s Tale”)では、偉人達は、親族もしくは部下に、裏切られ殺害される。「医者の話」(“The Physician’s Tale”)では悪徳の判事からの恥辱を免れるために、美しい少女が父の手によって殺される。「女子修道院の話」(“The Prioress’ Tale”)では、主人公の子供がユダヤ人に無残に殺される。「食料管理人の話」(“The Manciple’s Tale”)では妻の浮気に怒り狂ったフィーボスが妻を斬り殺す。『カンタベリー物語』の「死」には、人間が与える喪失の悲しみと現実世界での殺人の恐怖が意識的に表現されているのである。

『カンタベリー物語』では「死」に対してどのように受け止められているのか。「騎士の話」(“The Knight’s Tale”)では、物語の最後に、「死」への受け止め方が教示される。テセウスは、「この世の死について人間は必ずいつか死ぬ (I. 3027- 30)、それはこの世の決まりである (I. 3034)」と滔々と説く。テセウスはこの世の死の悲しみに対して「最初に真の悲しみが存在することを見つめることから始めよう (I. 3073- 4)」と言う。死の悲しみを避けるのではなく、しっかりと受け入れることである。これは、避けられない「死」という悲しみに対する一つの心の構え方であり、死に対する慰めである。注意したい点は、テセウスが言及した「死」は、殺人や病死をすべて含めた全般的な「死」であることである。しかしながら、その後続く『カンタベリー物語』の死は、殺人に焦点が当てられているのは興味深い点である。

「殺人」の物語を聞いて、テセウスが示した死に対する処し方、すなわち、悲しみを直視すること、それらを巡礼者たちが実践できているかどうかは疑問である。例

えば、幼児が無残に殺される「女子修道院長の話」を聞いた巡礼者たちは沈んでしまう。その後、巡礼者チョーサーが(おそらく意図的に)「サー・トパス」(*Sir Thopas*)という笑い話をして、沈んだ場の空気を変えようとする。他の巡礼者の楽しい話をして、巡礼者達の殺人や死の恐怖は解消され、確かに慰めとなるかもしれない。しかし、それは一時的な解消であり、殺人の本質に目を向けていないことになる。巡礼者は道中で「死」の悲しみをしっかりと受け止めることなく、ただ楽しい物語を聞いてその場をやり過ごしているのである。

巡礼者が他人の物語で「慰め」を得る方法は、悲運に見舞われたボエティウス最初に行う「慰め」の方法に類似する。『哲学の慰め』の冒頭で、冤罪により投獄されたボエティウスが、ただ自身の運命から目を背けて、詩作に耽り自分の悲運を慰めている場面がある。その時、理性の象徴である「哲学」が登場し、ボエティウスの傍らにいた、「感情」によって悲しみを慰める女神たちを追い払い、ボエティウスを “It is they who teach their varieties to choke and destroy, by the pernicious brambles of the passions, the most abundant and useful crops of reason.” と叱責する。¹³ 「哲学」は、ボエティウスが感情に浸り、自身の悲しみから目を背けていることに叱責したのである。楽しい話を聞いて「死」の悲しみを慰める巡礼者の姿は、ボエティウスが悲しみに浸っているときに、詩の女神に頼って詩を創作して自身を慰める姿と同じと言えるのである。

チョーサーは『カンタベリー物語』の最後を「教区司祭の話」(“The Parson’s Tale”)で締めくくる。「教区司祭の話」は、悔悛と七つの大罪についての説教である。それまでに語られた巡礼者の行為は、宗教的観点からみれば、罪にまみれた行為にあたり、こうした行為は、殺人を引き起こす場合がある。例えば、「修道士の話」は “pride” を原因として、偉人達が殺される。また「免罪符売りの話」では “greed” が引き金となってお互いがお互いを殺し合う。「教区司祭の話」の前に語られる物語は、騎士道物語、猥談、動物寓話など「俗」を象徴する話が多い。「教区司祭の話」とそれ以前の俗人の話は、「聖」と「俗」の “contrarie” の関係にあることになる。「教区司祭の話」は、基本的には、ペンナフォルトの聖レイモンド (St. Raymond of Penaforte) の『悔悛の大全』(*Summa de poenitentia*)、ウィリアム・ペラル

¹² 『カンタベリー物語』に描かれる「殺人」について詳しくは “The Monk’s Tale” の裏切りと殺人について・The Canterbury Tales の巡礼との関わり (OLIVA 19号、関東学院大学英米文学学会、2013.) を参照。

¹³ P. Ridpath, trans., *Boethius’s Consolation of Philosophy, Tr., with Notes and Illustr. rpt.*, (South Carolina: Nabu Press, 2013) 5.

ドス (William Peraldus) の『悪徳大全』(*Summa viiorum*) などといった論文が原形にあると指摘される。¹⁴「教区司祭の話」は、俗人の楽しい話に対して、「理性」を象徴すると言えよう。ただし、チョーサーの皮肉的な性格を考慮すると、「教区司祭の話」を巡礼の最後に理想的で完璧な話として捉えるのは危険である。本論では、あくまで、「教区司祭の話」が「理知的」な側面を示していることに留めておく。巡礼者たちは、憂う気持ちを楽しい話で慰めるだけでなく、最終的には教区司祭の説教話に辿り着くことになる。このプロセスは、悲運に絶望したボエティウスが、詩を創作し、自分の運命から目を背けるのではなく、「哲学」の理性によって慰められる形式に類似していると言えよう。巡礼者たちは最後には、現実世界の悲しみの原因に対して、神に目を向けているのである。

「俗」の話から教区司祭の話のプロセスの点で、『カンタベリー物語』の「死」への救済の一つの形をみることができる。そもそも『カンタベリー物語』は、聖地カンタベリーへ赴く巡礼の話である。14世紀に巡礼は、物見遊山の傾向が高まる。一方で、「ジェネラル・プロローグ」(“General Prologue”)では、人々は、病気の治癒と結びつけられる聖人トマス・ア・ベケットに参拝し自然と巡礼したいという気持ちになる。「ジェネラル・プロローグ」の冒頭では、三月の乾いた生命の育たなかった大地に、四月の雨が降り、再び大地が潤い、自然が活動を始める(I. 1-7)。不毛の大地である「死」から、再び花々が咲き始める「生」への「再生」を見ることが出来る。巡礼者がこの季節にカンタベリー大聖堂に赴こうとする動機もまたこの自然の再生に関わっていると言える。枯れた大地に雨が降り草木や花が育つことは、人の枯れた魂を復活させ、信心を再び蘇らせたと言える。つまり、人々の信心を再生させたのである。¹⁵ 同様に、トロイルスが「死」のような苦しみの果てに

得た喜びは、「冬に木々は枯れて干涸びるが、五月になると緑に衣替えする(III. 351-7)」と描写される。「冬」はトロイルスの絶望的な心境、草木が生い茂る「五月」は、クリセイデと結ばれた幸福の心境を示している。

冬から春という自然の再生は、いわば、死からの復活である。幸福を失い死に至る悲劇の『トロイルス』の根底には「救い」のモチーフが見られる。『カンタベリー物語』と、同時に「救い」も与えられている。『トロイルス』と『カンタベリー物語』には「死」に対する救いと希望があり、両作品は、「死」というテーマを共有していることになる。

1380年代中期、チョーサーの生活は、あまり順調と言えるものではなかった。1385年に税関の職を解かれ、1387年には妻フィリッパが亡くなる。チョーサーの作品は晩年になるにつれて、ボエティウス由来の世の無常が作品の端々で表現されている。後期の作品になるに従い、詩人の目は、どこか冷やかで、それまで以上に一步引いた場所に身を置き、その視点から、地上の世界を眺めている。『トロイルス』は「死」を強調し「救い」に結びつけた。『カンタベリー物語』に至っては、ただの死ではなく、殺人という死に限定し、それを巡礼の形で、その物語の中で可能な救いを描いている。チョーサーは決して政治にコミットすることはない。例えば、恐らく目の当たりにしたであろうワットタイラーの乱のような歴史的イベントについても作品中で意見を述べることはしない。1380年代、チョーサーは40代になり、これまで、宮廷で多くの裏切りや殺しを目の当たりにし、人間世界の不安定さを嫌でも感じてきただろう。確かに、チョーサーは、ユーモラスで滑稽な詩人の顔、愛の詩人の顔をもつ。その一方で、『トロイルス』から『カンタベリー物語』へと通じて表現された「死」と「救い」は、この不穏な時代と逆境にいたチョーサーの真摯な心性の一側面を示していると言えるだろう。

¹⁴ Robert M. Correale and Mary Hamel, ed., *Sources and Analogues of the Canterbury Tales*, (Woodbridge: D.S. Brewer, 2003) 530-41.

¹⁵ “General Prologue”と“comedy”の関係については「人間視点に描かれるチョーサーの巡礼の一側面—ボエティウスとの関わりから—」(『チョーサー・アーサー・中世浪漫 II』多ヶ谷有子編, ほんのしろ, 2013.)を参照。